講演録

日本の里山を撮る
～人と自然が織りなす風景・そこで息づく人間の知恵～

小野泰洋

私たちにとって最も身近な自然である里山を、私たちの祖先は自然資源を持続的に利用することで維持してきた。地域における自然利用の知恵は、ESDにとっても重要な要素として注目されている。里山を取材し、映像化してきた小野泰洋氏をお招きし、里山のすばらしい自然とその自然を維持させてきた人間の知恵について、映像上映と講演を行っていただいた（2013年６月４日、立教大学太刀川記念館３階多目的ホール）。

NHKは15年ほど前から里山を撮り続けており、今は全国の里山100か所を記録しています。この「ニッポンの里山」は、写真家の今森光彦さんと共に、様々な里山を最新鋭のカメラで記録し、次世代に残していこうというプロジェクトです。

「里山」という言葉自体は昔から日本にありましたが、1940年代に、森林生態学者である京都大学の四手井綱英先生が、林学の用語として使い始めたのが一般に広まったきっかけと言われています。林学では「奥山」という言葉が使われていました。奥山とは、村から離れた山の奥で、スギやヒノキなどを生産する経済的な価値がある山のことです。ところが、四手井先生は、奥山だけではなく、家の裏山や集落の端にある平地の森なども、同じように価値があるのではないかと考えました。

たとえば、家の裏山は、薪や肥料の材料となる葉や、シイタケ栽培のためのほだ木を採るなどして利用されていました。そこで生まれたのが「里山」という言葉です。それを知った今森さんが、里山を撮り始めたのが20年ほど前。今森さんが撮影を始めたことで、里山が一気に世に広まったと言われています。

現在知られている「里山」は、農村のような、人間が自然に少しだけ手を入れて、自然を利用しながら暮らしている環境を指します。私たちは、全国の里山を探す上で、里山の解釈を少し広げることにしました。それは「人の暮らしがあり、そこに生きものや植物がいれば、すべて里山である」ということです。たとえば、立教大学のキャンパスでも、みなさんが勉強している傍らに生きものが共生していれば、それは里山だと考えます。なぜなら、そこには必

新潟県十日町市の棚田。撮影：今森光彦（以下同）

長野県白馬村の青鬼集落。アルプスの山々が棚田に映る。

ず人と生きものが一緒に暮らせる何らかの知恵や工夫があるはずで、それを見つけだせれば、私たちが自然と共生していく上でのヒントを得られると思うからです。

「ニッポンの里山」では、東京都からも 2 か所とりあげています。1 か所は、大田区の池上本門寺です。本門寺の屋敷林は、400年前から木が植わっていて、そこにたくさんの生きものが棲んでいます。このような生きものの住処が見られるのは、人々が本門寺を大事に扱い、また本門寺が社寺林を大切にしてきたからということで、ここを里山と捉えました。もう 1 か所は伊豆七島の利島です。島の人々が自生した椿を島中に植え、椿に覆われています。その結果、人々は椿の実から油を採取して暮らしに利用し、島の産業にもしてきました。また、椿のおかげで、様々な野鳥が棲むようになりました。人々が椿を植えたことで、豊かな多様性のある環境が生まれた例です。

里山が、なぜ注目されるのか。まずは「ふるさとの原風景」ということです。日本は、南北に長く四季がはっきりしています。地球儀をみて、日本の緯度を辿ると、横に並んでいる他の国々は、砂漠や乾燥地帯がほとんどです。ところが、日本は潤っていて緑豊かで、四季がはっきりしています。それがつくりだす美しい風景が、里山にはあります。そこには、人がいて自然があるだけでなく、生きものも暮らしています。ですからこの風景は、人と自然が調和して生まれているわけです。風景を丁寧に見ていくと、人がいろいろと自然に手を加えているのに、なぜ水はきれいなのか、なぜ生きものが棲んでいるのか、という知恵が見えてきます。このように里山の風景を探して、そこにどんな物語があるのかを探ることが、番組のねらいです。里山

静岡市の茶畑。草が生えている土手を茶草場（ちゃぐさば）と呼ぶ。人が定期的に草を刈ることで、キキョウやオミナエシ、ユリ、ランの仲間といった日本在来の植物が、茶畑の近くに咲いている。

静岡市の茶畑。

青森市のリンゴ園。リンゴの樹洞にフクロウが巣をつくる。毎年同じ木に営巣するフクロウのためにその木が枯れないよう手入れする。

秋田県三種町。ジュンサイの沼。農家は箱船に乗って収穫する。

では長い時間をかけて、人が自然に手を入れながら、人と生きものや植物が共生できる場が生まれているのです。

里山が注目される理由の 2 番目は「生物多様性」です。里山の中には、人が手を加えることで、生きものが棲めるようになった場所がたくさんあります。2010年に、愛知県でCOP10（生物多様性条約第10回締約国会議）が開催され、そこで日本政府は世界に里山をアピールしました。世界各地にも人間が自然と共生していくための知恵やヒントがあるのではないか。それを再興し、さらに活用していこうと世界に提案しました。これは「SATOYAMAイニシアティブ」と呼ばれ、いま世界中の研究者が里山を探す活動を行っています。里山は、生物多様性の場としても、世界的に注目されているのです。

3 番目は「共生の知恵」です。人間がいいものを作ろうと、農業にしっかり取り組む結果、生きものが棲めるという知恵がたくさんあります。どこの里山へ行ってもそうした知恵があるということを、番組の中で必ず一つ紹介しようと心がけて、里山を探しています。

4 番目は「日本人としての自然観」です。日本人は、欧米人に比べて、自然を愛でる・楽しむという感覚をもともと持っているのではないかと強く感じます。

では、里山に住んでいない私たち、東京に住んでいる私たちは、一体どうしたらいいのか。それは、やはり里山に出かけることだと思います。今日の話が、里山の見方の一つになり、今まで見ていた風景の中から、何か違うものを見つけだすきっかけになるとありがたいです。

里山は世界に誇る日本ならではの美しい空間です。そこは、人と生きものが共生する場です。自然を生かしながら利用する知恵も生きています。日本の原風景の中で、本物の恵みが生みだされているのが里山なのです。また、詩人のアーサー・ビナードさんが、日本人は里山によって育てられてきたと語っています。里山を失うことは、日本が人材も失うことなのだということも、改めて考える必要があると思うのです。

小野泰洋（おの・やすひろ）NHKエンタープライズエグゼクティブ・プロデューサー。1983年NHK入局。初任地の仙台局で5年間を過ごした後、主に科学関連分野の番組を担当。著書にNHKスペシャル「コウノトリがよみがえる里」（2006）の舞台裏をまとめた『コウノトリ、再び』（共著、エクスナレッジ、2008）がある。

新潟県十日町市。星峠の棚田。

岩手県遠野市。雪の森から馬が木材を運びだす。切った木の先に小さなソリをつけて馬に引かせる「馬搬」。